

特集にあたって

若山 邦紘

一昨年福岡で第3回APORS国際会議が開かれた時でした。高校生向けのORの例題を集めて数学の副読本になるような読み物を作らないかという話が出ました。このような話が出るにはいくつかの伏線があったのではないかと思います。大学受験生の減少傾向、加えて理系ばなれ、高校カリキュラムにおける情報処理の必修化に伴いこれまでとは違った数学教育の必要性の高まりなどさまざまです。本音を言わせていただければ、数理的な目を通して問題解決を図るのは自然科学だけでなく、社会科学の問題にも役立つことを高校生あるいは高校の教員にも知ってもらうことで「ORとは何か」を認識させ、ひいては大学でORを学ぼうとする優秀な生徒を増やそうという魂胆があったわけです。このような活動をするには学会に研究部会を設置しておこなうのがよいだろうということになり、95年度から「高校生のためのOR研究部会」(略称：ORhigh)が発足しました。

センスのよい人、口の悪い人など一癖も二癖もある経験豊富な人がほとんどという大変な部会です。そのうるさい人たちから「おまえの精神構造は高校生なみだから主査にふさわしい」といわれ、「それも尤もだということと、田口さん(中央大)となら高校生なみの会話ができる。彼が幹事を務めてくれるなら」ということで主査を引き受けました。その後の何回かの部会の集まりで、メンバーが作った題材を持ちより、その発表を肴にどうしたら高校生が興味をもち理解するかなど議論を重ねてきました。そんな問題では高校生が面白がらないとか、やれシグマの記号は使わないほうがよいとか、インテグラルはだめだとかいわれ悪戦苦闘するメンバーを傍でみているとなかなか愉快ですが、自分で実際に書くとすると「易しく書く」とは如何に難しいものかが分かるものです。

ようやくいくつかの例題がたまりつつあるところで、部会のメンバーの一員でもあるOR誌編集委員長である逆瀬川さんから「面白い例題はいろいろなところで役に立つだろう。3月号に特集を組むから原稿の執筆者とテーマを決めてe-mailで送れ」と命令され、いま

だ生の資料だけで完成の域には至っていない中途半端なものとは知りつつも、遅いよりは早い方がよからうと考えてこれを引き受け、主査と幹事の独断と偏見で執筆者とテーマを決め、無理やり指名しました。そんなわけで、中には「これでは高校生には無理だ」とお叱りをうけるような部分もあるかと思います。可能な限り時間ぎりぎりまで書き直しをお願いしたりして、手を加えてまいりましたが十分とはいえません。それに書き方もばらばらで不統一なところがあるかと思いますが、何でも気軽に引き受けてしまった主査の責任です。ご勘弁ください。しかし、それぞれが面白い問題ですので、大学の初等的な授業でも何かの参考になるのではないかと身勝手な解釈をし、本特集にはすこし難しい内容の原稿も掲載することにしました。

昨年の9月に柳井先生(慶應大)が和歌山県教育研修センターの指導主事、小山宣樹先生を部会に招き、われわれの話を聞いてもらいご意見をいただくということになりました。これがきっかけになり、この特集号が発行されるのとちょうど同じ時期に和歌山県の高校数学教員の研究会とOR学会との共催で、和歌山県の田辺市において「高校生のためのOR」のシンポジウムを開催することになりました。

高校生にORに興味を持ってもらうにはどのような題材を提供したらよいか、というテーマについて具体的な題材を取り上げながら、高校と大学の実情にもとづいた議論をおこないたいと考えています。関連学会との合同シンポジウムはOR学会でも経験のあることですが、高校の先生方とのシンポジウムはOR学会としても初めての試みになり、いい経験になるものと期待しています。

このような過程の中での本部会の活動状況を学会員に知っていただくという目的で本特集を企画しました。それぞれの内容は最終的な目標にはやや遠いかもしれませんが、部会メンバー以外の学会員の方々にもわれわれの活動に関心を持っていただき、ご意見や題材の提供があればまことにありがたいことだと考えています。